

企業スポーツの在り方とこれから The State of Company Sport in Japan and Suggestions for the Future

1K07B223-5 山本望

指導教員 主査 リー・トンプソン 先生

副査 岡田桂 先生

【序論】

オリンピックや国際大会には、常にビッグビジネスがあり、メディアは、大会を大きく取り上げ、日本中に発信していく。それらの大会に出場する選手のほとんどは、どこかの企業に所属し、競技をしている会社員の割合が高い。

このように、企業のサポートを受けて大舞台で活躍する選手が多いことから、逆に言えば、企業がなければ、日本のスポーツはここまで発展していなかったかもしれないといえる。企業スポーツはトップアスリートを排出する貴重な環境なのである。

しかし、その企業の受け皿を見た時に、大学で、ある程度の成績を残した選手でも、競技を続けることが困難になっているという現実がある。10年間陸上競技を続けてきた私自身もそれは、非常に感じる場所である。

この論文では、企業スポーツが社会にどのような影響を与えているかということや、企業スポーツの在り方や、求められる意義、「企業・スポーツ・選手」という関係性にも迫る。最終的には、これからの企業スポーツの展望を述べる。企業にとってスポーツとはどのような認識なのか、位置づけなのかを明確にし、今の日本におけるアスリートの現状、社会状況などを含め、私なりの結論を出したいと思う。

【先行研究】

企業スポーツは長い歴史の中で、日本のスポーツ界に大きな影響と役割を果たしてきた。しかし、景気によって左右されやすい企業スポーツは、不景気により、スポーツ界からの脱退を余儀なくされた。それによって選手は、行き場を失くし、生活の基盤さえも奪われることとなった。そのような選手たちにインタビューをして生の声を聞いたところ、そこには、痛々しい声があった。廃部を機に引退をしてしまった選手、まだ競技を続けたいのに所属場所がなく、当惑する選手、それぞれだ。このような事実は酷く、企業にも大きな責任がある。

【方法】

企業はスポーツをどのように捉えているのかということインタビューした。インタビューは、株式会社ミキハウスに所属し、陸上競技の110メートルハードルをしているモーゼス夢選手に50分程度インタビューを行った。彼の自己ベストは、13秒76で主な実績としては、

東アジア競技大会の日本代表で、日本学生陸上競技対校選手権大会優勝などの実績を残している。企業側は、社長室の藤原啓太さんに一時間程度行った。彼は、社長の一番近くで、企業スポーツに携わっている。そのインタビュー内容と新聞記事や、IOCの中間報告書の内容を比較した。

【結果】

ミキハウスは、企業スポーツを「社会貢献」のためにやっているとこたえてくれた。スポーツへの理解も深く、今後の展望や課題についても明確であった。選手と企業の距離も近く、コミュニケーションもとるようにしていた。

しかし、過去の企業スポーツに関する新聞記事や、IOCによる中間報告書によると、企業スポーツを「広告・宣伝」の一環として捉えている企業があり、不景気によって廃部をせざるをえなくなる状況を作り出していることが分かった。

【結論】

インタビューをしたミキハウスは他の企業に比べて特殊で、社会的にも大変大きな役割を果たしている。スポーツ自体を販売促進に使ったり、広告塔としては使用しない。

だが、あいつぐ休・廃部の背景には、多くの企業は自社の広告のため、または、その手段としてスポーツ選手を利用し、広告塔にしているという背景があった。

企業は、企業スポーツを広告宣伝のためだけのものとして捉えるのではなく、もっと広く長期的な視点で企業スポーツを捉えて、「何のために企業スポーツを行うのか」、という目的をもう一度明らかにするべきである。

企業とスポーツは古くから非常に密接な関係を持ち、子供がスポーツを始めるきっかけとして、「憧れのスポーツアスリートの存在」があることから、社会的にも影響は大きく、切り離すことはできない。だからこそ企業は、今の日本のスポーツ界、アスリートの悲鳴をしっかりと受け止め、企業スポーツの目的、保持意義をもう一度見直し、企業スポーツを改善していくべきである。